



臨床糖尿病支援ネットワーク

MANO a MANO



“mano a mano”とはスペイン語で“手から手へ”という意味です

糖尿病の名称変更「ダイアベティス」に 思うところ・・

【当法人評議員】

埼玉医科大学総合医療センター

足立 純一郎 [医師]

先日、日本糖尿病学会と日本糖尿病協会の合同会見で、糖尿病の新しい呼称として、「ダイアベティス」を提案すると発表がありました。最近、スティグマ、アドボカシーなど患者さんに聞かれてもすぐに答えられないカタカナをよく耳にする機会も多くなり、私なりに考えてみました。

この新しい呼称には、現代医療の進歩と社会の変化が背景にあります。治療の進化によって血糖管理が改善し、糖尿病患者も健常者と変わらない生活を送ることができるようになりました。一方、社会には不正確な情報や知識に基づいた誤った偏見が残り、自らに非がないにもかかわらず社会からの負の烙印(スティグマ)を押されます。それぞれの患者さんが不当な評価にさらされることなく、適切なサポートを受け、社会の一員としてその能力を発揮できる環境を目指すべく、日本糖尿病学会・日本糖尿病協会を中心にアドボカシー活動(人権問題や環境問題などで社会的弱者の権利擁護や、主張を代弁することなど)を展開しています。“糖尿病”という病態を正確に表現していない病名が、社会的偏見を助長する要因のひとつとして、今回の提言がなされました。

病名の変更がすべての問題を解決するわけではありませんが、病名が持つイメージや偏見が、患者さんたちにとっては大きな負担になることがあります。これを減少させるために病名を変更する動きがあるのは、心から歓迎すべきことだと思います。また、病名変更の先例として、「分裂病」が「統合失調症」という名称に変わったことは記憶に新しいところです。この変更は、患者さんや家族に対する社会的なスティグマを減らす上で、重要な役割を果たしました。また、痴呆症から認知症の名称変更も、1)言葉のイメージとスティグマ、2)医学的精度の向上、3)人間性の尊重、4)国際的な用語の統一、という理由にも基づいて変更が行われました。このように、言葉は時とともに社会の意識や医学の進歩に合わせて変化していくものであり、名称の変更はそれを反映しているのかもしれない。

「ダイアベティス」という言葉は、ギリシャ語で「通り過ぎる」とか「サイフォン」という意味があります。糖尿病の英語表記は、“diabetes mellitus”なので、国際的な用語統一という観点からはよいのかもしれない。個人的には「ダイアベティス」よりもう少し良いネーミングがあるような気はしますが・・皆様はいかがお考えでしょうか？



読んで
単位を
獲得しよう

西東京糖尿病療養指導士(LCDE)は、更新のために5年間に於いて50単位を取得する必要があります。本法人会員は、会報「MANO a MANO」の本問題及び解答を読解された事を自己研修と見做し、**1年につき2単位**(5年間で10単位)を獲得できます。毎月、自分の知識を見直し、日々の療養指導にお役立てください。
(「問題」は、過去のLCDE認定試験に出題されたものより選出、一部改変しております。)

問題 ● 次の文章を読んで以下の質問に答えてください。

15歳、男性。罹病歴7年の1型糖尿病。発症時は母親がインスリン注射を行っていた。小学校高学年から自分でインスリン注射を行うようになった、中学生になってクラブ活動としてサッカーを行うようになり、空腹感が強くなり、食事摂取量が増え、間食も増えた。最近のHbA1cは9.2%である。

この患者について誤っているのはどれか、2つ選べ。

1. 母親がインスリン注射を行うようにする
2. クラブ活動を運動部から文化部に変更することを提案する
3. 血糖コントロールが不安定となる時期である
4. 個人を尊重して「見守り、待つ」かわりが必要である
5. 低血糖と同様に肥満に注意が必要であり、体重計測を定期的実施する



報告

災害対策委員会 第10回患者さん向けセミナー

日時: 令和5年8月26日(土)
オンライン

[当法人理事] 東京都立多摩総合医療センター 辻野 元祥 [医師]

市民向け糖尿病災害対策セミナーは、コロナ禍で久しく、直接開催ができませんでしたが、4年ぶりにリアルで、「いつ来てもおかしくない大災害！～糖尿病をもつ方の災害対策とは？」のタイトルのもと、8月26日土曜日、武蔵野スイングホールで開催されました。また今年度は、北多摩南部保健医療圏糖尿病医療連携検討会および南多摩保健医療圏糖尿病医療連携検討会との共同開催となりました。

オープニングリマークでは、宮川 高一先生から、西東京臨床糖尿病研究会から臨床糖尿病支援ネットワークに至るまで、多摩地区でどのようにして糖尿病災害対策に取り組んできたか、その歴史について紹介がありました。その後、「医師の立場から」で私、辻野から、東京都に起こりうる地震、富士山噴火による降灰、大規模水害などの説明、災害時の内服薬やインスリン製剤の対処方法について解説させていただきました。「看護師の立場」として、クリニックみらい立川の菅原 加奈美先生から、普段から備える災害用品として、かなりのものが100円ショップで準備可能なこと、災害時の留意点などについて解説してもらいました。「薬剤師の立場」として、杏林大学医学部付属病院薬剤部の小林 庸子先生からは、災害時に自分の服用、注射している薬剤をどのように伝えるかのコツについて解説してもらいました。クロージングリマークとして、当法人代表理事の近藤 琢磨先生から総括のご挨拶をいただきました。会場には、30名ほどの患者さんやご家族、10名の関係者が集まり、熱心にご聴講いただきました。

来年度は、2回目の市民向け糖尿病災害対策セミナーを、多摩府中保健所の講堂で、2024年3月2日(土)14:30～16:00に開催する予定です。詳細はこれから詰めて参りますが、患者さんやご家族にもご案内くださるようよろしくお願いいたします。

報告

第8回看護に役立つ糖尿病フットケアセミナーin多摩

日時: 令和5年8月26日(土)
場所: オンライン

[当法人理事] 中島内科クリニック 中島 泰 [医師]

令和5年8月26日(土)15:00よりクロスウェーブ府中にて「第8回看護に役立つ糖尿病フットケアセミナーIN多摩」が開催されました。本年はコロナ禍となって初の企画であり、ハイブリッドでの実施となりました。代表世話人のイムス三芳総合病院 貴田岡 正史先生の開会の挨拶に始まり、総合司会を武蔵野赤十字訪問看護ステーション 豊島 麻美看護師にお務めいただきました。

第1部「教育講演」では、立川相互病院皮膚科科長 尾立 冬樹先生に「当科に於ける足潰瘍治療の取り組み」についてご講演いただきました。体重の負荷、繰り返す物理的圧迫、小さな傷をきっかけとし、局所の相対的な酸素不足が生じ、足潰瘍、壊疽に至ります。早めの免荷指示、身近な資材での免荷の仕方、感染創への実用的な対応を教えてくださいました。糖尿病の状態と足病変の進行にはタイムラグがあり、早めの受診で良いので専門外来へ紹介するようお話いただきました。

第2部「事例提示」では、多摩北部医療センター 町田 景子看護師に「継続加療で支える足潰瘍症例」についてご講演いただきました。足の観察、足病変のアセスメント方法、靴選び、爪切り、陥入爪の処置などを教えてくださいました。ブラックヒール(踵や胼胝内などの角質層内への出血)や関節の変化、靴擦れや足の浮腫など患者の足をよく観察し、早めに変化に気付く重要性を強調されました。



第3部「実演・実技」では、町田 景子看護師に具体的な足の観察、爪切りについて実演をいただきました。その後、会場では、フットモデルを用いた実習を行いました。

2年ぶりの実技を含めた開催となりましたが、多くの方にご参加いただき、非常に密度の濃いセミナーとなりました。

報告

臨床糖尿病支援ネットワーク 第75回例会

日時: 令和5年9月1日(金)
オンライン

【当法人会員】 公立昭和病院 高橋 克敏 [医師]

肥満症は効果的治療法に限られ、長期療養を要する“難病”の側面をもつ疾患です。今回はこの肥満症に焦点を当て、かたやま内科クリニックの片山 隆司先生に「行動修正療法の進め方と薬物療法の未来像」、多摩総合医療センターの辻野 元祥先生に「肥満症診療における減量手術の立ち位置」という講演を賜り、出席者111名の学びの多い盛会となりました。

片山先生は、肥満症診療ガイドライン2022を概説され、コーチングの基本知識や実地診療での行動修正療法のコツ、薬物療法として従来から上市されている食欲抑制剤や肥満合併糖尿病に対して減量効果のある薬剤についてレビューしていただきました。肥満外来でのご経験からか、たくさんの“引き出し”を持たれていることがとても印象的でした。

辻野先生は、減量手術を概説された後、手術を希望する方でも実際に手術に至るのは約3割にとどまり、精神疾患含めた様々な障壁のため手術に至らない方が少なくなく、逆に非手術療法だけで肥満が改善する方がいることをお示しいただき、精神科医も含めた多職種からなる重症肥満対策チームを紹介されました。個々の患者さんにとっての減量治療の意義も考えておられ、“patient-centeredness”の姿勢もお示しになりました。

最後になりますが、ご講演いただいた両先生、企画・運営にご協力いただいた皆様、ご視聴いただいた皆様に、この場を借りて感謝いたします。

報告

第22回糖尿病予防講演会

日時: 令和5年9月2日(土)
場所: 武蔵野公会堂

【当法人業務執行理事】 武蔵野赤十字病院 杉山 徹 [医師]

2023年9月2日(土)に武蔵野公会堂にて第22回糖尿病予防講演会を開催致しました。テーマを「生活習慣を科学的に見直そう」とし、人間が健康に生きていくために欠かせない生活習慣である食事・睡眠・運動について、それぞれのエキスパートの先生にご講演いただき、市民の方々にも科学的データに基づいた視点で改めて考えていただくことを目的としました。

当法人代表理事の近藤 琢磨先生と東京都糖尿病協会会長の渥美 義仁先生に開会の辞をいただいた後、講演1では東京医科大学八王子医療センター 栄養管理科の深谷 祥子先生に「糖尿病にならない、悪くさせない食事術」というテーマで食事の方法や考え方について5つのポイントを挙げて解説いただきました。講演2では野村病院予防医学センターの小川 和雅先生に「睡眠と生活習慣病を科学する」と題して、睡眠の基礎知識、睡眠不足による悪影響、さらに睡眠時無呼吸症候群についてわかりやすく解説いただきました。講演3では順天堂大学大学院代謝内分泌内科学・スポーツロジックセンター教授の田村 好史先生に「糖尿病の予防と治療と身体活動」について解説いただき、運動・身体活動の重要性やその具体的な方法・考え方などを学びました。

いずれの先生にもエビデンスを踏まえた科学的視点とともに具体的な実践方法までわかりやすくお話しいただいたことで、質疑応答もかなり盛り上がり、参加された146名の方々の心に響く、大変盛況な講演会となりました。ご講演いただいた先生方、ご協力・ご参加いただいた皆様、誠にありがとうございました。



深谷先生



小川先生



田村先生





第28回日本糖尿病教育・看護学会学術集会

令和5年9月23日(土)～24日(日)

岡山コンベンションセンター

[当法人会員]

多摩センタークリニックみらい

名嘉真 香小里 [看護師]

本年度の日本糖尿病教育看護学会は2023年9月23日～24日に岡山で開催され、現地参加をさせていただきました。新型コロナの影響下で、今年度も現地開催を中心としたハイブリッド開催となりました。

コロナも5類感染という位置づけとなり、本来の学会のにぎやかさを取り戻しつつあります。コロナ禍でなかなか顔を合わせることがなかった友人たちと久しぶりに会って話すことができたこと、岡山のおいしい魚が堪能できたこと、それだけで現地に来てよかったと感じました。しかし現地参加の困難な参加者のためのオンデマンド配信の縮小化には残念さを感じてしまいます。現地で参加していても十分な聴講が難しいとき、また、もう一度ゆっくり自宅で復習したいときにオンデマンド配信は学会をまた楽しめるよい機会なのですが。

今年の学会のテーマは「withコロナの時代、心と身体が元気になる療養支援を考えよう」です。心と身体が元気になる療養支援とは？なんだろう、と自分なりに考えました。私にとっての療養支援を支えているものは研究です。些細な疑問であっても研究を行うことで考えを深めることは常に看護や療養の在り方に新鮮な考え方を取り入れることに役立ちます。だからそんな研究の発表の場である学会は、私にとっては心と身体が元気になる療養支援そのものです。

さて私が今回一番楽しみにしていたテーマは、「委員会セミナー 研究推進委員会 質的研究のポイント インタビューの劇的ビフォーアフター」です。質的研究のメインであるインタビューの方法については、実際の場面を各委員会の講師の方々がインタビュー役と患者さん役を演じることで、インタビュアーと患者さんとの間で生じるすれ違いについての気づきや、どうしたらうまく話が聞くことができるのかを動画も見ながら楽しく学ぶことができました。

さて研究を続けてきていつも思うことですが、看護学会の発表は質的研究がメインであり、私たち看護職にとつての研究のテーマは量的研究では計り知れないことが多くあるということです。質的研究はわかりづらく相談する相手もないという現実。質的研究を行うにあたって、インタビュアーと患者さんとの関係性、インタビュアーの経験値や感性が結果や解釈分析に関与するというのをどう考えるのか。経験値の少ない看護師にインタビューを任せると結果の信憑性はどうなるのか。セミナーを聴講した後もそんな疑問が沸き上がり、セミナー後に研究推進委員会企画の研究相談所まで行き、話を聞くこととしました。

人によってインタビュー内容が変わることもあるが、それも一つの結果として考えればよいのではないかとということ、いろいろ経験値を踏むためには実際経験することが大切ということを考えました。研究についての考えや思うことを話す場があることが素晴らしいと感じ今後もこの研究推進委員会を応援していきたいと思いました。とても収穫の多い学会となりました。

読んで
単位を
獲得しよう

答え 1, 2 下記の解説をよく読みましょう。

(問題は1ページにあります。)

解説

思春期は、自立のための準備期であり、患者自身の主体的な自己管理へ移行し、自立を促す関わりが大切となるため、1は誤り。個人を尊重し「見守り、待つ」関わり(4:正)、糖尿病という理由で患者の選択に支障がでないような関わりが必要であるため2は誤り。また、成長ホルモンや性ホルモンの影響でインスリン量の増加が必至かつ血糖コントロールが不安定な時期でもある(3:正)。患児の空腹感が強くなっている要因として、部活動による活動量の増加から必要エネルギー量が増えていること、低血糖が出現していることが考えられる。低血糖と同様に体重増加しやすい時期であり、運動と食事のバランスをとる必要がある(5:正)。



事務局からのお知らせ



事務局へのお問い合わせは当法人ホームページで常時受付けております。ご返信にはお時間をいただく場合がございますが、順次対応させていただきます。お急ぎの方は平日の10:00~12:00 / 13:00~16:00にお電話くださいようお願いいたします。

新機能「糖尿病支援の相談室」が新年度からスタートします！

当法人ウェブサイトにおいて会員限定の「糖尿病支援の相談室」を開設いたします。会員の皆様がお互いの知恵や知識を共有できるよう、糖尿病支援に関するご質問・ご相談をご投稿いただき、それに対する回答を他の会員から募集する仕組みとなっております。普段の糖尿病支援において何かお困りのことなどあればご遠慮なくご投稿ください。また、投稿されたご相談内容に関して、自施設ではこのようにやっているなどの経験談や学会や講演でこのように言われていたなどの耳寄り情報がありましたら、回答をどんどんご投稿ください。各専門家の先生方からのご回答も是非お願いいたします。糖尿病診療に携わる皆様が当法人の会員であるメリットを活かせるよう、皆様と共に作り上げていきたいと考えております。是非とも積極的にご活用ください。

<入り口はこちらから>



一般社団法人
臨床糖尿病支援ネットワーク
CAD-Net
Clinical Assistance of Diabetes Network

ホーム 代表理事あいさつ 法人のご紹介 セミナー・イベント 入会のご案内

糖尿病に対する
医療の質の向上、医療連携、
患者様への支援に
取り組んでいます

医学研究倫理審査のお申し込みはこちらから

お答え
します

糖尿病 Q&A
糖尿病に関する基本的なことを中心にQ&A形式で解説しています。

糖尿病支援の相談室
本法人会員の皆様から疑問や悩みなどお寄せの質問・ご相談を受け付けています。質問をいただいた後、各専門科、他の会員様からの回答を募集することができます。

セミナー・イベント情報
2025/11/07
【オンライン】第4回臨床倫理講座① 希 希フリスデー500の巻
2025/11/11
第14回 フルーライトアップ スカイツー復興祭

新着情報
2025/11/01
【診療の現場へ】会報11月号を発行しました
2025/04/30
3年ぶりに開催しました、第22回糖尿病診療科長会総会が成功裏に開催されました。

《投稿方法のご紹介》

糖尿病支援に関して、皆に聞いてみたいことを以下の方法で投稿してください。

- 1) マイページへログイン
- 2) TOPページから「糖尿病支援の相談室」へ遷移
- 3) 右上「質問新規投稿」をクリック
- 4) 入力画面に必要事項を記入して「入力内容を確認する」をクリック

- 5) 確認画面で間違いがないか確認できたら「質問を投稿する」をクリック
- 6) 正しく投稿できると「受付完了」のご案内がメールで届きます。

《回答方法のご紹介》

投稿に対して「当院では、こんな風に対処しています！」という内容を以下の方法で回答してください。

- 1) マイページへログイン
- 2) TOPページから「糖尿病支援の相談室」へ遷移
- 3) 質問一覧をチェックし、回答したい質問をクリック
- 4) 質問下部に表示される「回答新規投稿」をクリック
- 5) 入力画面に必要事項を記入して「入力内容を確認する」をクリック

- 6) 確認画面で間違いがないか確認できたら「回答を投稿する」をクリック
- 7) 正しく投稿できると「受付完了」のご案内がメールで届きます。

発行元

一般社団法人 臨床糖尿病支援ネットワーク事務局
〒185-0012
国分寺市本町2-23-5 ラフィネ込山No.3-802
TEL:042(322)7468 FAX:042(322)7478
<https://www.cad-net.jp/> Email:info@cad-net.jp

編集後記



この時期になると、「今年はどうな一年だったか。楽しかったことは…、成長できたことは…、反省点は…」と自分自身に対して内省することを毎年行っています。ちなみに私は、コロナ5類移行に伴い対面で研修会事業やプライベートでの会食ができたことで、人との繋がりの大切さを再認識でき、とても充実した1年でした！皆さんはどんな1年を過ごせましたか？
(広報委員 長谷部 翼)